

領域番号	1801	領域略称名	グローバル関係学
研究領域名	グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立		
研究期間	平成28年度～平成32年度		
領域代表者名 (所属等)	酒井 啓子（千葉大学・大学院社会科学研究院・教授／グローバル関係融合研究センター長）		
領域代表者 からの報告	<p><u>(1) 研究領域の目的及び意義</u></p> <p>グローバル化の進行によって、シリアやアフガニスタンなど内戦による避難民やロヒンギャ難民の増大、グローバルな武装勢力の拡大、世界大に広がる移民排斥感情など、国家や地理的に規定された従来の地域を越えて共通・連動する諸問題が増えている。こうした人類全体が直面する現代的諸問題が示すのは、主権国家とそれを軸とした国際社会という近代社会科学的「常識」が溶解し、社会の安定と発展を確保してきた諸制度が機能不全に陥っているということである。20世紀の2つの世界大戦と冷戦は学問としての国際関係論の発展をもたらした。しかし、非国家主体、トランスナショナルな主体の役割が高まり、予測不能で意外な広がりを持つ現代的「グローバルな危機」が頻発する21世紀の今、新たな「関係論」が必要であり、それこそが本研究領域が目指す「グローバル関係学」である。「グローバル関係学」は、ローカルな社会関係から国家間、さらには文化・文明圏間の関係まで、複雑な関係性が交錯する網の上に「グローバルな危機」が浮き上がると考えて、複雑に関連しつつ広がるさまざまな規模、レベルの関係性を総合的に分析する、専門地域や分野を越えて横断する新学術領域である。本研究領域は、非欧米途上国への徹底した現地調査を重視する日本の地域研究的視点を導入することにより、欧米中心の視座を相対化し、日本独自の「グローバルな危機」の解明と解決を図る実践的な応用研究へと発展させるという意義を持つ。</p>		
	<p><u>(2) 研究成果の概要</u></p> <p>現代の「グローバルな危機」を「グローバル関係学」を用いて解明する試みは、以下の2方向で進められている。第一は、現地語、現地社会に精通した地域研究者が、「グローバルな危機」に曝されている国、地域でその社会に密着したきめの細かい現地調査を実施し、二次資料のみに依拠した研究では把握できない、独自の観察を定期的に行うことである。領域内の研究者は、イラク、レバノン、エジプト、トルコなどの中東、パキスタン、ウズベキスタンなどの南・中央アジア、セルビア、チェコなど南東欧・東欧、エチオピア、南アフリカ、シエラレオネなどのアフリカ、ミャンマー、インドネシア、タイ、フィリピンなどの東南アジアで、インタビュー調査や世論調査の実施、現地語資料の収集などにあたっている。</p> <p>第二は、「グローバル関係学」という、従来の地域研究や国際関係論とは異なる新たな学術領域を確立する理論化の作業である。この2年間は「グローバル関係学」の学理確立に最大の力点を置き、分野、地域横断的な討議を繰り返してきた。その過程で、主体ではなく関係の複雑な交錯から発生する「出来事」に分析の焦点を当てるべしとする試論が確立され、シンガポール国立大学と共催した国際会議「グローバルな難民危機」など国内外の学会で発表された。今後はその試論に基づき事例分析を積み重ね、実証分析と理論の双方において「グローバル関係学」を確立し、国際学会を通じて分析結果を世界的に発信する。</p>		

<p>科学研究費補助金審査部会における所見</p>	<p>A- (研究領域の設定目的に照らして、概ね期待どおりの進展が認められるが、一部に遅れが認められる)</p>
	<p>本研究領域は、世界各地で頻発する紛争や難民・移民といった国境を越える人の移動をはじめ、従来の国際関係論と地域研究のそれぞれの枠内では十分に捉えられない現象の解明を目指すものである。この目標に向けて、現地調査や資料調査に加え、研究会やシンポジウムといった共同研究を精力的に遂行し、若手研究者の育成などに尽力していることは評価できる。</p> <p>しかし、評価報告書やヒアリングを通じて、理論面で鍵となる「関係性」の概念については、理論としての射程を明らかにすることや概念の明確化といった課題が完全に解消されたとは言えず、現時点で提示されているものが概念的な明晰^{せき}さを備え、それによりいかなる現象が新たに説明可能となるものかが、必ずしも明らかになったとは認め難い。</p> <p>また、分析の対象とする事象をどのように選択し、いかに分析していくのかといった方法論についても明確とは言い難い点が残る。理論と実証研究の接合についても十分な成果を見ておらず、一部の計画研究には、進捗にやや遅れが見られる。</p> <p>新たな学術領域の創出につながるよう、これらの課題を乗り越え、研究の更なる進展が果たされることを期待する。</p>